

# 第4回WORK! DIVERSITYカンファレンス パネルディスカッション①

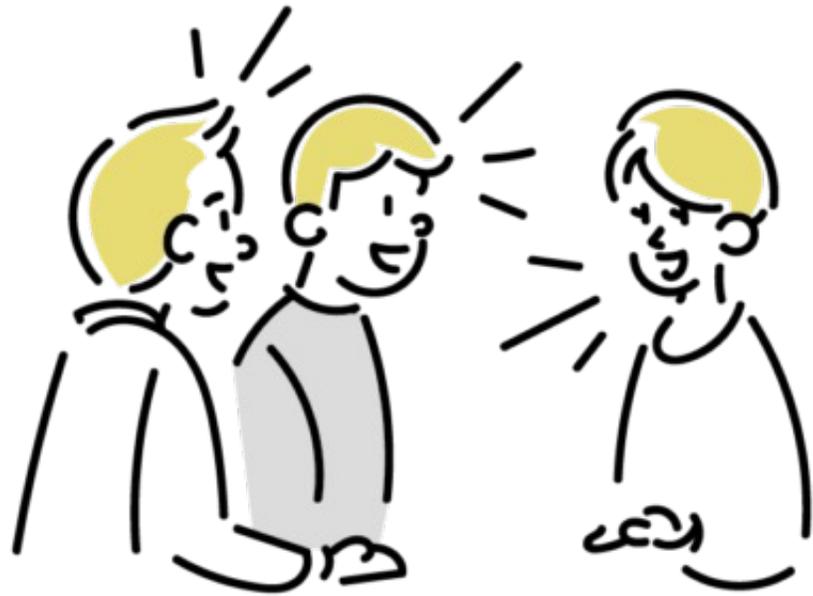
「生活困窮者自立支援法“就労準備支援事業” VS.  
WORK! DIVERSITY“障害者就労支援横断化”」

【冒頭説明】

面高 有作（博士、心理学）



# “就労準備支援事業” VS “障害者就労支援横断化”

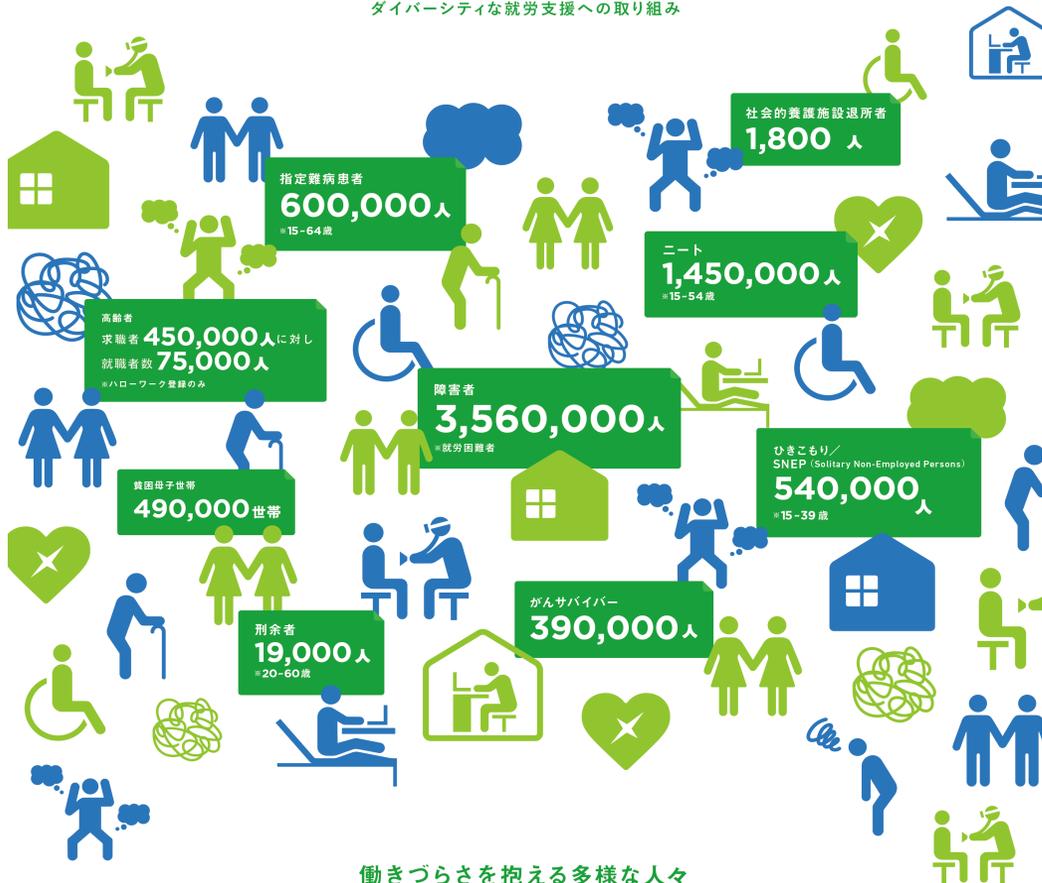


- 就労準備支援：
  - 自治体、就労準備支援実施事業者、生活自立支援センター等での聴き取り（2県11市5区）
- WORK! DIVERSITY：
  - 福岡県でのモデル事業にオブザーバー参加

# 多様な就労の支援が必要

日本財団 |  
**WORK! DIVERSITY**

すべての働きづらさをテーマにした  
 ダイバーシティな就労支援への取り組み



働きづらさを抱える多様な人々

**1500**万人  
全国のおよそ  
**1/8**人

ニート (15-54歳)	広義引きこもり (15-39歳)	ネットカフェ難民 (20-59歳)	ホームレス (64歳以下)
145万人	54万人	0.4万人	0.3万人
非就労障害者 (15-64歳)	難病患者 (15-64歳)	がん患者 (15-64歳)	HIV陽性者 (15-64歳)
356万人	60万人	48万人	1.7万人
AIDS患者 (15-64歳)	若年性認知症 (18-64歳)	薬物経験者 (15-64歳)	アルコール依存症 (15-64歳)
0.6万人	3.1万人	81万人	109万人
LGBT (15-64歳)	刑余者 (20-64歳)	貧困母子世帯	高齢者
220万人	1.9万人	49万世帯	329万人

# 生活困窮者でも、障害者でもある（ない）

- **これまでの線引きがあてはまらない**時代にあるのではないか？
- 支援者の経験、勘、つて、頼りではないか？
- **重層的な支援展開**が必要ではないか？
- **無意識の偏見**（先入観や思い込みによって偏った見方）に取り組む必要があるのではないか？、「**透明な排除**」



# 支援につながりにくい人への支援のあり方

## 【方法】

対象：

- コーディネート室  
利用者156名

評価：

- WHOQOL26
- WHODAS2.0

## 【結果・考察】

- 全体として、同年代一般人口よりも低い
- **障害の程度に応じて介入のポイントを検討する必要性**

中等度：身体、心理



重度：社会的関係、環境

- QOLの構造が一般人口と異なる
  - 心理と環境が寄与

**中等度までが医療・心理支援につながりやすい可能性**  
**重度になると環境調整のニーズが加わる**

## Impact of mental and developmental disorders on disability in Japanese university students: A cross-sectional study

Yusaku Omodaka, Takeshi Sato & Toru Maruyama

To cite this article: Yusaku Omodaka, Takeshi Sato & Toru Maruyama (2022): Impact of mental and developmental disorders on disability in Japanese university students: A cross-sectional study, Journal of American College Health, DOI: [10.1080/07448481.2022.2068961](https://doi.org/10.1080/07448481.2022.2068961)

To link to this article: <https://doi.org/10.1080/07448481.2022.2068961>

- 精神的健康が損なわれる  
→ 障害水準が高まる

予防的な関わりや、二次的障害を防ぐ  
支援環境の整備が重要  
→ 早期からのアウトリーチなど

**Table 3.** Average score and standard deviations by diagnosis and WHODAS domain and results of the dispersion analysis (N=152).

Diag.	No diagnosis (N=83)		Mental disorders (N=36)		Developmental disorders (N=24)		Multiple (N=9)		H	df	p	Multiple comparison
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD				
Cognition	17.23	15.35	28.33	21.94	23.54	16.91	32.78	20.93	10.63	3	.014	
Mobility	6.63	10.80	18.58	17.77	5.99	9.12	13.89	19.96	14.07	3	.003	None, Developmental < Mental
Self-care	5.06	8.02	12.50	14.22	8.33	14.35	6.67	10.00	7.95	3	.047	None < Mental
Getting along	21.49	23.18	40.74	25.49	41.32	28.81	32.41	29.89	19.99	3	.000	None < Mental, Developmental
Life activities (school)	36.57	29.23	56.35	26.66	36.61	28.90	66.67	18.21	18.27	3	.000	None < Mental, Multiple Developmental < Multiple
Participation	23.69	21.13	40.51	18.08	26.39	18.54	42.59	25.92	21.26	3	.000	None < Mental
Overall disability	19.39	14.41	33.60	16.24	24.76	14.15	34.80	10.63	25.01	3	.000	None < Mental, Multiple

"Multiple" refers to those with both mental and developmental disorders diagnoses. Analysis was performed after excluding four individuals with physical disabilities from the 156 subjects.

H: Kruskal-Wallis H; df: degrees of freedom.

# 統一的な評価・アセスメント

- KPSビジュアルライズツールによる「見える化」
  - 段階ではなく**同時**
  - **日常生活自立、社会生活自立、就労自立**
- 地域ごとの特徴（支援資源等）
- 主観的な適応、満足、の視点
- 取り組みの評価→政策評価



# 地域におけるプラットフォームづくり

- 就労準備支援をおこなっている事業所同士や、その他、「働きづらさを抱えている人々」を支援している支援者同士のつながりを深める仕組み
- **地域を活性化**
- **意識の醸成**
- 無意識の**偏見**への対応、**接触仮説** (Intergroup Contact Hypothesis) (Brown, R., & Hewstone, M., 2005)
  - 相手の集団的な特徴を意識しつつ接触した方が効果的
  - 集団的な属性を意識しつつ、個人的に親密な交流を持つ

# “就労準備支援事業” VS “障害者就労支援横断化”

- **これまでの線引きがあてはまらない**時代にあるのではないか？
- 支援者の経験、勘、つて、頼りではないか？
- **重層的な支援展開**が必要ではないか？
- **無意識の偏見**（先入観や思い込みによって偏った見方）に取り組む必要があるのではないか？、「**透明な排除**」



課題感を踏まえた、私の考え→「

」